

あけのほし 2015 年 10 月

「愛着障がいと私たち」(1)

菊田行佳

「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者(神が人に勧めていること)である。」

(マタイによる福音書 7 章 1 2 節)

秋は祭りの季節です。子どもの頃、毎年楽しみにしていた祭りの夜に友達と遅くまで遊んでいた思い出は、かけがえのない大切なものとなっています。今も同じように、祭りの夜には大人たちに混じって子どもたちが、友達と連れだって楽しそうに過ごしている光景を見かけます。男女のグループに分かれて行動しているのがほとんどですが、本当は一緒になって過ごしたいとどちらも心の中では望んでいるでしょう。しかし、その壁を越えることは、いつの時代も難しく、なかなか声をかける勇気が出ないものです。そんな中、自分の子ども時代から一つ変わっていることを発見しました。それは、中学生くらいの女の子のグループですが、みんなで記念の写真を撮ろうとしているとき、少し離れたところで一人だけスマホ(携帯電話の新種)をいじっている子がいたことです。もうシャッターを押すという瞬間までその中に入ろうとしませんでした。グループの一人が声をかけて、ようやくその輪に加わりました。

個人で楽しむ遊びを否定するつもりはありませんが、ただせつかく友達と滅多にない夜遊びを出来る機会を与えられているのですから、もっとみんなで楽しむことを積極的にすれば良いのにと思いました。そして周りを見渡しても、やっぱり友達と来ているのに、スマホをいじっている子どもたちが結構いることに気が付きます。私も以前、せつかくお茶を飲みに来ているのに、相手の人が携帯のメールを返信するのに必死になって、放っておかれたことを経験しています。あれは嫌なものです。その人にとって、メールの相手は大切であるのですが、目の前にいる自分はなんだかどうでも良いといわれているようです。だったらどうしてそんな自分とお茶なんか飲まなくちゃいけないのかと、言ってやりたくなりました。

一応、忍耐力が少しついた大人さえそう思うものなので、これがこれから発達して行こうとしている幼い子どもだったら、その心に受ける傷がどんなに大きいか想像がつくでしょう。私が乳児を育てていた時期に聞いた話です。赤ちゃんが母親から授乳するとき、単に栄養素だけを摂取しているのではなく、惜しみない愛情を受け取ることで、命を健やかに形作って行けるのだということです。ですから、条件さえ整えば母乳を受けた方が良く、その場合は抱っこされて、母親の手と体に包まれているという安心の情の中で子どもはこの世界で生きて行くための力を養って行きます。目を開くようになった乳児には、目を見つめながら、気持ちを込めて見つめ返すことが大切ですと、教わりました。もちろん、母乳が出ない母親もいます。その時は、哺乳瓶からミルクをあげるときも、同

じように抱っこして、心を込めて、目をそらさずに授乳させることが出来れば、それはそれで良いのだということです。問題なのは、スマホや携帯がその母子の關係に割って入ってきて、赤ちゃんから目をそらさせ、抱っこをしない方が操作がしやすいと思わせることの方です。

私たち日本人の社会は、戦後アメリカの社会のおよそ20年ぐらい後を追いかけて来たという言われ方がなされます。アメリカ社会で問題となったことが、次に同じことが日本でも起こるという意味で使われています。アメリカ社会では、個人の幸福を何よりも優先して追求して来た結果、様々な社会的な諸問題を生み出してきました。その一つの大きな要因として、幼少期に発生した「愛着障がい」があると考えられます（岡田尊司『パーソナリティ障害』2004, PHP新書）。それはつまり、幼少期に本来献身的に捧げられた愛情に満たされることで、その後の人生において適切な人間關係のパターンを形成することが出来るのだという発達条件を喪失した状態のことを表しています。それが、個人の幸福の追求が、親子關係にまで持ち込まれて、子どもの欲求を満たすことより、親の欲求を満足させることを優先させることによって、本来必要とされる愛着が与えられないために、安心感が喪失し、満たされない承認欲求を常に追い求めるといふ不安定なパーソナリティを形成してしまうというものです。

子育てという人生の選択の中では、本来幸福の追求の仕方は変わるはずですが、そこにおいては、当然、親の側の欲求を満たすことを一時的にも放棄しない限り、子どもの欲求を満たすことは出来ません。つまり、子育てというのは自己犠牲が初めから要求されていて、親の側の献身によって初めて成立するものなのです。しかし、親の側の欲求がたとえそこで満たされなくても、子どもの存在と成長とが、自ら捧げた犠牲への見返りとして、時間をおいてではありますが、必ず帰ってきます。つまり、即効性はなく、確かさが見えにくくはありますが、それでも、長い人生を通じて発揮される継続的で、人と人との關係において最も良い形で現れる能力を形成するのに、愛着は最も価値のある事柄なのだということなのです。

私たち日本人も、幸福の追求として、短絡的で即時的な欲求を満たすことに、より心を奪われているのだとすれば、子育てをするには大変危険な環境にあるということがいえるでしょう。自己本位な欲求を満たすことを優先するパーソナリティは、他者の心の傷つきに気がつくことが出来ません。共感する能力がなく、いわゆる良心のない人間に育ってしまいます。いじめから始まって、セクハラ、パワハラなど隣人を傷つけることが当たり前になっている今の日本社会の背景に、このような愛着障がいの問題が潜んでいると言つて良いと思います。

自分がして欲しいことを自分もする。それは、自分がして欲しくないことを、人にもしないということでもあります。私たち人間の本当の意味での幸せは、個人で獲得できるものではなく、家族や、友達や、そして社会に暮らすすべての人との間に、あるはずです。共感することの出来る心を、もう一度取り戻して行きたいと願います。